

## よいところみつけを通した指導のあり方

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域

櫻井 英輔

### 1. はじめに

私が教職大学院を入学した理由は、2つある。

1つ目は、学部の4年次に、そのまま現場に出る力量が自分にあるか疑問に思ったことである。その折に、教職大学院の話聞いたことも一つの転機であったと思っている。

2つ目は、自分の中に教師としての自覚をつけたいと感じたからである。教職大学院には、教師としての力量を高めるために、学生が集まる。その中で、切磋琢磨していくうちに、しっかりとした教師としての基盤を作っていきたいと考えた。

この2年間は、自分が期待していた以上の学び、経験そして出会いがあった。

### 2. 主題設定の理由

#### (1) 学校サポーターを通して見た児童の実態

私は、学校サポーターとしてみよし市立北部小学校に通った。教師力向上実習Ⅰ・Ⅱは、ここで行った。

みよし市立北部小学校で、1年次には、3年1組、3年2組、年度が替わり2年次には4年1組を中心にサポーターとして携わった。児童たちは、賢い子が多く、授業の中でも教員側の予想を超えてよい考えを出すことも何回もあった。そして元気いっぱい遊ぶ児童に交じって楽しくサポーターとして活動した。しかし同じ児童たちを半年見続ける中で、一部の児童が自分本位で動き、楽しければよいや自分でなければよいといった考えや行動が見られた。その考えや行動のために集団生活を行う中でよくないと思われる問題や事件を起こしてしまうという課題を感じた。

私は、この課題を解決していくための実習を行っていききたいと感じた。

#### (2) アンケートから見えた児童の実態

##### ①教科に対する児童の考え

児童の実態を、主観だけでなく客観視するために各教科について、好き、得意、簡単かどうかについて5段階でアンケートを教師力向上実習Ⅰ（以下実習Ⅰ）と教師力実習Ⅱ（以下実習Ⅱ）でそれぞれ行った。

その結果によると、4年1組の児童は、実習Ⅰ（6月）の時点では、好きかどうかでは主要教科では、理科が平均4.4、副教科では図工が平均4.6、体育が4.5という高い値であった。理科、図工、体育は、実習Ⅱ（11月）でも同じような高い値をとっている。

数値の変化に大きな差は見られなかった。次に得意か

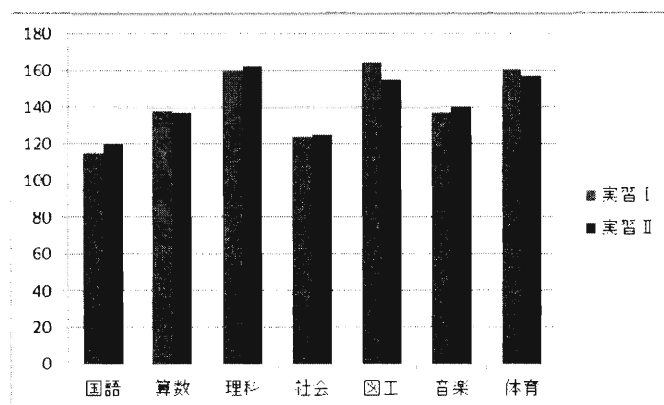


図2-1 (4年1組36人の5段階評価の好きの値を合計したグラフ)

どうかでは、実習Ⅰの結果が理科の平均3.9、図工が平均4.1、体育が平均4.2という高い値をとった。実習Ⅱになると、値は下がったがこれは、第4学年の学習の難易度の上昇が結果に影響しているのだと考える。特に図工は、新たな道具や始めて使うものが入ってきていて、苦戦している姿を見ているのでそれに関係していると考えられる。同様に、児童も各教科に対する難しさの認識が平均して0.4上昇している。

以上のことから、実習を行った児童は、理科・図工・体育が好き・得意と感じているが、難しさも同時に感じ始めていることを知ることができた。

##### ②児童の挙手に対する考え

次に、挙手の重要性などの児童の意識を同じようにアンケートで調べた。調べた項目は、挙手することへの意欲、実際に挙手できているか、挙手することが重要度と思うか、テストが重要だと思うか、ノートについて重要だと思うかである。前期は、挙手の意欲が平均4.0、実際に挙手できているかどうかは、平均3.5であった。後期は、その幅が広がり、意欲が、平均3.7、実際に挙手できているかに対しては、平均2.7と中心である3を割ってしまっている。さらに、挙手について重要と思うかについては、前期平均4.7、後期平均4.3と高いことから、児童の中でも、必要だと思っているが、手を挙げられてない現状がわかった。また、テスト、ノートが重要だと感じているかに関しては、前後期共に、4を平均がこえていて高かった。こうしたことから挙手をさせるための手立てが授業を行っていく中では重要であることがわかった。

### (3) なぜよいところみつけなのか

テーマをよいところみつけを通した指導とした理由は、2(1)であげたような現状を感じたからである。

課題として、①一部でみられる自分本位で動く児童に対しての指導、②自分より相手のほうが悪いと考える自己中心的考えに対しての指導、③指導時の自暴自棄感に対する支援、④他人への興味の希薄さの改善の必要性、⑤授業への参加意欲の低さを感じた。

もちろん一部の話であり、クラス全体がそうではないのだが、その一部の現状を変え、活気づけばよりよいクラスになっていくと考えた。

よいところみつけをテーマとしたのには、自尊感情、中でも自己肯定感が深くかかわっている。

荒木紀幸編著『教育心理学の最先端 自尊感情の育成と学校生活の充実』の中で竹田レイ子は、「自分にもいろいろなことができる」とわかり始めると、何事も積極的になる。自信のなさから友達関係を避けていたものが、余裕が出てくると、友達の言うことを素直に聞けるようになる。自分からはたらきかけもできるようになる。児童に自分には出来ないと思いつていることに正面から向かわせ、乗り越えさせることが自尊感情を高める第一歩であると考え。」<sup>1)</sup>と述べている。

自己肯定感、自尊感情の中でもプラス(肯定)の感情に関係する。ある児童が高い自己肯定感を持つことができれば、自分自身を「好ましい人間」と感じ、自分の行動を積極的に「価値のあるもの」として評価すると考えることができる。

そして、自己肯定感を高めるために必要なのは、他者からの評価だと私は考える。他者(教師やその他の児童、家族)から認められることで、自信を持ち、それが支えとなって竹田が言う「自分には出来ないことを乗り越えさせることができる」<sup>1)</sup>と考える。

よいところやよい行いは褒められることが容易である。そこから自信を持たせ、自己肯定感を伸ばしていきたいと考え、実践を行った。

本実践では、最初に述べたような課題を2つの方向から解決しようと考えた。

まず1つ目は、児童がよいところを互いにみつけ、伝え合うことで自己肯定感を高めたいと考えたからである。他者に認められることで、人は、安心してその場所に存在することができる。

3年生の段階で、自分を卑下することや友達なんかいないという児童がいた。その児童は自己肯定感が低く、そのため自分も、まわりも、全部気に入らないといった風であった。「おれなんか」と言う言葉も何回か聞いた。そういった児童も、他者からよいところを教えて貰うことで、自分を知り、自己肯定感が高まり、自己を否定していくことが少なくなればと考えた。それと同時に周りとの関係性を作っていくことができる

ようになっていけばと考え、実習Ⅰの計画を立てた。

そして2つ目は、授業の中で活躍することで自信をつけさせ、意欲を持って授業に参加させることである。その経験が自信となり、自己肯定感を高めることになる。そのために、教材研究を行い、教材のよいところをみつけることで、教材について深く理解し、授業を行うことができるようにしようと考えた。特に、児童が好きな値が高い、算数、理科で授業を行うことで、意欲を引き出しやすくなる。算数は、図形という具体物が多く出てくる領域であり、理科は、実験が多い単元を実習Ⅱで行うこととなった。

## 3. 教師力向上実習Ⅰ

### (1) 児童の実態とテーマ設定のねらい

それまでの学校サポーターを通して、自己肯定感に関係する2つの児童の実態があると私は感じた。

1つ目は、自分のよいところや長所を書くことができない児童が複数名いることである。道徳や学級活動の時間などでそういった自分のことについて書くことができない場面に数回遭遇した。自分を知らず、自分のよいところを知らないために自己肯定感が低く、自信がないようであった。

2つ目は、実習Ⅰの前までに見てきた児童の中には、一部ではあるが、自分本位で動き、「楽しければよい」や「責任の所在が自分でなければよい」といった考えが見られ、集団生活を行う中でよくないと思われる行動が時折見られた。例として、休み時間のサッカーが終わった後にボールを人気のないほうに蹴飛ばし、他の児童に片付けさせ、自分自身はさっさと帰ってしまうといったことやけんかの原因が、嫌なことを言われて殴ったなど手を出してしまうことがあった。また「なんで僕だけ怒るの」や「～(他の児童)が～(自分が関係なく相手だけに非があるように聞こえる悪いこと)なことやってきたんだ」といった他人にトラブルの責任や原因を押し付け、自分は悪くないと置き換える場面に何度か遭遇してきた。

そこで、認め合うことで他者を意識し、自分を知って、自己肯定感を持てる児童、自分の間違いを認めること、何が悪かったのかを正しく見ていくことができる児童に育てたいと考えた。そこで実習Ⅰのテーマ設定を『認め合える子ども、自分を見つめられる子どもから“一日のふりかえり、よいところみつけを通して”』とした。

### (2) 活動の系統性

教師力向上実習Ⅰを行うにあたって、実習を通して系統性を持たせようと考えた。図3-1で示すように道徳⇒日常的な実践⇒特別活動という順番で実践を計画した。系統性を持たせることで、実践に一貫性を持たせ、指導できると考えたためである。指導に一貫性を持たせ、自己肯定感を一層伸ばすことを目指した。

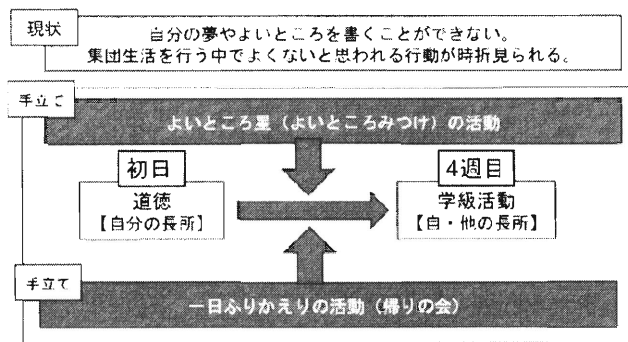


図3-1 (現状と手立てについての図)

児童にまず自分のよいところをどれだけ書くことができるのか道徳の教材“力持ちの新助さん”を扱った授業の中で把握させようと考えた。3(1)で述べたように、それまでの学校サポーターの活動で、児童が自分のよいところや長所などを書けない現状を把握していた。そこでその課題をはっきりさせ、児童に自覚させる事も含めて、道徳の授業を実践の中に位置付けた。そして、「自分のよいところをまだ自分では知らなかったり、少なかったりするなら友達に見つけてもらおう」ということを児童に伝え、「よいところ星」の実践を行った。自分の長所の気づきと友達のための気づきを意図して行わせることにした。また、普段の生活の見直しも行いよりよい生活態度を身につけるためにふりかえりカード(自己採点カード)も行うこととした。これは、1日の反省を児童が次に生かすためという目的と、児童とのコミュニケーションの場を設定したいという意図もあった。そしてそれらの実践のまとめとして、自分のよいところを知るための時間を特別活動の中で設けた。授業時間数は少ないが、常時の活動として、よいところ星と帰りの会でのふりかえりカードを行うことで、つながりを持たせようと考えた。

### (3) 道徳

まず実践を行うにあたって、すべての実践の導入の手立てとして道徳の授業を実習Iの初日に設定し授業を行った。

「力持ちの新助さん」の教材を使った授業で問題提起を行った。教材となる「力持ちの新助さん」は、明るい心4年(愛知県道徳副教材)の「1-(5)個性の伸長」を目的とした教材である。構成を、興味付け(導入)、本文の範読、本文について考えさせ、自分の経験の想起と他者との共有、よいところみつけ活動の動機づけとして授業を行うこととした。

まず教材研究のために、実際に物語に出てくる力石について教材自体が西尾市の若一神社にあるため、実物を見に行った。

図3-2のような写真をいくつか授業で使うことで児童に教材に興味を持たせようと考えた。またみよし市の位置と西尾市の位置を地図で確認し、実際に自分の住んでいる愛知県の話であることも意識させ、より身近に感じさせるようにしようと考えた。



図3-2 (力石と私の写真 掲示用)

授業の中でねらいとした価値は以下のように考えた。人はそれぞれ個性を持っていて、その個性は、一長一短である。個性のよさに気づき、積極的に伸ばすことは、自己を形成する上で大切なことだと考えた。また自分のよさに気づくことで、他とは違う自分らしさを知ることでもある。そのよさを自らの長所としてより一層伸ばしていく意欲が自己の生き方について考えを深めることにつながっていくと考える。自分のよさを知ることによって、自分にはない他者のよさの多様性も認めていくような心を育てたいと考えた。

さらに学級には、発言を自分から行わない児童がいた。手を挙げずにいるが、実際に当てられるとしっかりと意見を持って発言できる児童が多かった。女子には特にそういった傾向の児童が多かったため、自信をもって発言できる積極性と意欲を身につけさせたいと考えた。また自分の意見を書くことができない児童も数人いた。これらの児童にも、自分の意見を持てるような支援や声掛けをして、自信をつけさせ、発言していく力をつけたいと考えた。一方、男子は比較的、発言できる児童が多かった。しかし、前述のとおり、自分本位な発言や人の話を聞かずに発言する姿も一部で見られたので、自分のよさに気づかせる中で他者のよさにも気づかせ、伝え合えるようにしたいと考えた。

本文では、新助が力持ちという長所を伸ばして活躍するという内容が描かれている。新助のことを考えることで自分の長所は何かを考えさせ書かせた。

予想していた通り、数人の児童が書くことができずにいなかった。しかしながら、すぐに発言させるのではなく、書かせてから発言させることで多くの児童に発言させることができた。授業後の継続的な指導につなげるために、今回気づけなかった自分長所も友達に見つけてもらおうと児童に提案した。個性の伸長を授業で計るとともに、この授業をきっかけにして「よいところ見つけ」を継続して、自分のよいところを知っていくような環境をつくっていかうと考えた。そのため授業の最後に、一ヶ月集中して、「よいところ見つけ」と自己採点カードを行っていくことを児童に示した。

自分を見直し、友だちのよいところを教えたり、教えられたりする環境を作ることで、よいところをさらに伸ばそうという意欲を引き出すこと、自分の一日を振り返り、反省してよい行動を増やしていくようにすることを旨とした。

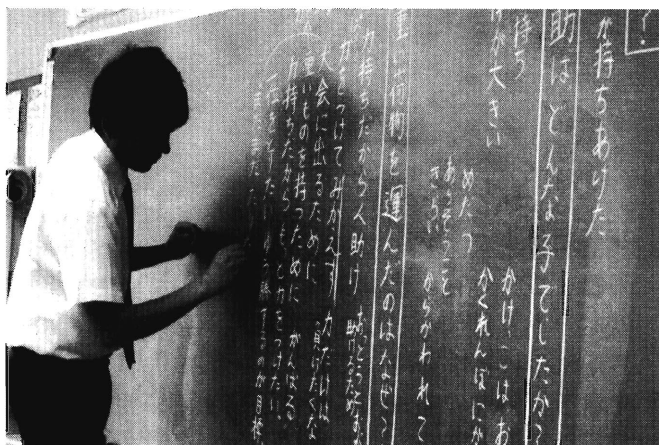


図3-3 (授業風景)

児童の反応はよく、事前に準備したよいところ星をみせて、意欲を持たせることに成功した。

授業自体は、反省点も多かったが、その後の活動との接続には、役立つ授業となった。

#### (4) ふりかえり(自己採点カード)

日常の活動の手立てとしてふりかえりを行わせたいと考えた。目的は、児童の心の変化の機微や何を考へ何を学級に求めているのか、どうしていききたいのかを正確に捉えていくこと、そして児童自身の見直しとコミュニケーションの場の設定である。そのために、簡単な、記録用紙を使い、「今日一日の自分の生活が何点だったかとその理由は」という質問で書かせ、毎日の記録と児童とのつながりとして朱書きを入れて返していった。普段のかかわりにプラスして、児童とコミュニケーションを毎日とっていった。

やることを児童に伝えたときは、まだやる内容についてよく理解していなかったのか、反応はまちまちであった。最初、児童が書いたものを見ると、一文であったり、無記入であったりした。そこで朱書きを加え、より多くのこと、よかったことも悪かったことも振り返ることができるようにしたところ、半数近くの児童の文章量が増えた。

全体を通して、多くの児童が、一日の生活を振り返り次に生かしてくれたように感じる。ただ、最初から自分は直すところがないと考えている児童やめんどくさいと考えている児童、ふりかえりを次に生かせない児童には、効果が薄かったようであった。普段の声掛けとあわせて、児童が成長ができるように支援していかなくてはいけないと感じた。実際の例を挙げる。

内容 90点くらい 悪いところはない。ただいいことしたっけ?この手どうしよう(手をけがしていた)たいこあるのに

内容 給食の準備をやったところ、食器上げとかは「手伝ってー」と言ってもHさんがティッシュ(お願いした)を持ってこようとしてくれたけど一人でやったから遅くなってしまい遅れる寸前だったから、もう少し手伝ってほしい。し、余裕をもちたい

上に挙げた2例は同児童である。書く文の量も増えているし、自分だけのことから学級のほうまで目を向けられている。自分の課題からクラスの課題へと移行している。日数を経るにしたがってこのような児童が増えた。

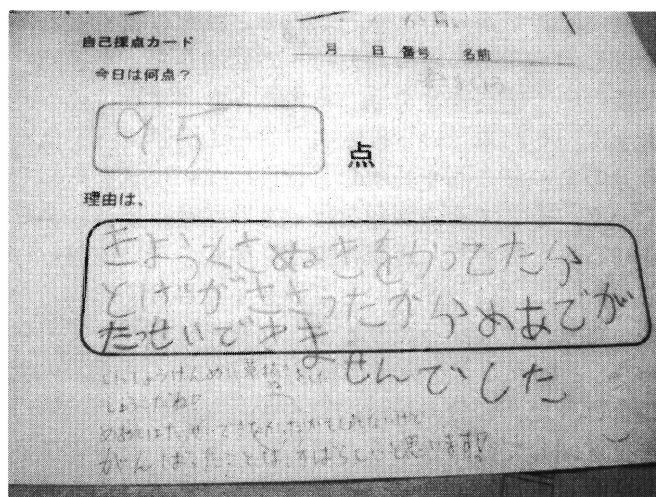


図3-4 (自己採点カード)

内容 今日草ぬきをかってたら(草ぬきをしてたらと草を刈っていたらが混ざったと思われる。)とげがささったからめあてが達成できませんでした。

朱書き 一生懸命草抜きをした証拠だね!めあて(けがをしないように気を付けよう)は、達成できなかったかもしれないけど、頑張ったことは素晴らしいと思います!

行動を褒め、意欲を持たせるように朱書きを行った。めあてを守ることよりもその児童の行動を評価し、次の行動につなげたいと考え朱書きを行った。朱書きを通して、評価していることを児童に伝えた。

毎日自分自身のことについてふりかえっていく中で、廊下を走らないなどのめあてを達成できる児童が増えた。しかしながら数人かは、最後まで短文であった。毎日同じことを書く児童についての朱書きについて難しく、似たような内容になってしまいがちであった。朱書きの幅や児童へ伝える力をもっとつけたいと感じた。最後のほうは、絵をかく児童や長く文を書く児童、質問をかく児童なども現れた。そういった児童に対しては、よいコミュニケーションの場になったと考える。

#### (5) よいところ星

目的は、よいことみつけを記録に残し、児童の振り返りのときの成果を目に見える形にすることである。黒色画用紙を壁に張って、そこに見つけた友達のよいこと、よいところを星の形の用紙に書いて貼っていく。

人のよいところを見つける活動を取り入れることで

相手を一人の人間として認め、それぞれが認め合う学級になってほしいと考えた。そのために自分から進んで、児童に例示していくことが大事であると考え、児童に任せるだけでなく、私も積極的に書くことにした。

児童に毎日、友達のよいところをみつけて授業時間と授業時間の間に書けるように専用の星形の紙を用意した。まず、1週間目は、黄色い星からはじめ、経過を見守った。朝の会で話す時間があつたので、児童にいくつ書かれたか、それを見て自分がどう思ったかを伝えた。そうすることで、より多くのよいところ星を児童が書いて掲示できるようにすることをねらった。この活動も自己採点カードと同様に、児童のやる気に個人差が見られた。書かれた児童は、意外と気づいていなかったこともあり、もっと伝えていく方法も考えなくてはいけないと感じた。男の子は、1週間目、2週間目に非常にたくさんの星を書いていた。3週間目、4週間目は、女の子が比較的多く毎日書いている姿が見られた。

活動前黒画用紙1枚分のスペースでどれだけ埋まるかを様子見た。

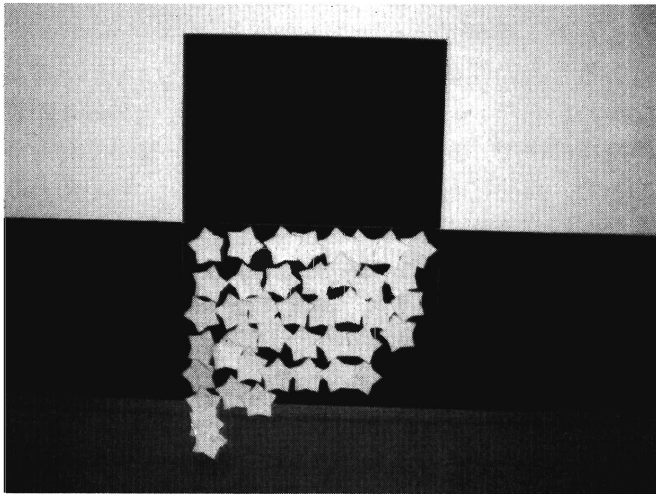


図2-5 (活動初日)

活動初日に思ったより多くの星が集まり、画用紙のスペースを大きくした。



図2-6 (児童の様子)

図2-6は、児童が星を見たり貼ったりしている様子である。何をやっているか明確にわかるように看板もつけた。2週目は赤い星にして1週目と分けた。赤を選んだ理由は燃える星のように頑張ろうと伝えた。同じように3週目は青に変え、実は青く光る星のほうが赤く光る星のほうが温度が高いことを伝えた。4週目は地球の緑として少しでも意欲をもってくれたらと思ひ、朝の会を通じて児童を啓発した。白は、4週目の学級活動の時間に書いたものである。3週目終了時、4つ切り黒画用紙の数は12枚にも及んだ。

実習最終日500枚以上の星が最終的に掲示された。書いた児童で一番多かった児童は、80枚以上、少なかった児童は1枚、書かれた児童で一番多かった児童は、44枚、少なかった児童は、8枚であった。

実習終了後、上の写真と裏側にその児童の星を貼りラミネートして児童に配った。どの児童も喜んでいて。中にはそこで初めてよいところ星の自分のよいところが書かれている星を見た児童もいるようであった。

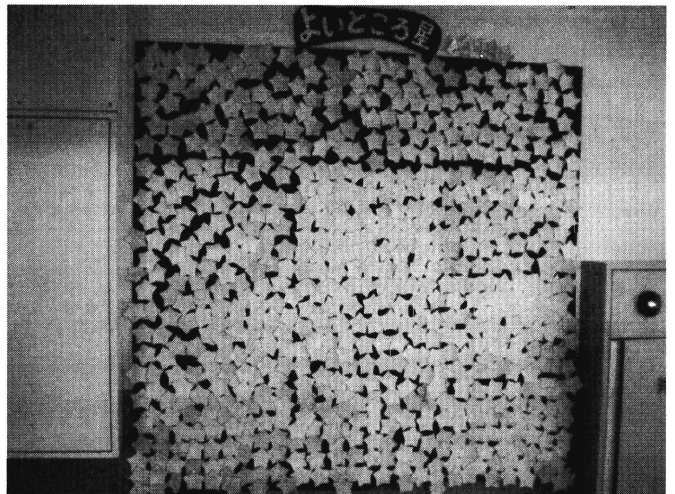


図2-7 (最終日のよいところ星)

真っ黒だった画用紙が星でいっぱいになった。

#### (6) 特別活動

これまでの児童の様子を見ると、自己主張できない子、発言できない子が、元気がよく何回も手を挙げるこの影に隠れてしまっていた。指名されれば答えることが多いものの、別のことをやっている姿も時折見られた。実習が始まってから、そういった子たちを含め、自己肯定感をつけ自信を持たせるために、よいところみつけをおこなってきた。

よいところみつけに名前がよく出てくるのは、よくもわるくも目立つ子が多かった。それでも3週間の間で、全員のよいところ星がでた。しかし、全員がそれを見ているかどうかは、掲示なので怪しいと感じた。そこで活動のまとめとして今までの星を提示しながら、自分のよいところを知るために学級活動を行った。他人のよい所を考え他人を認め、自分自身を知っていくためのきっかけとして、またよい行い、さらにはその

個性は、誰かが見てくれていて認めてくれているということに気づかせていきたいと考えた。よいところ星の数という成果の共有を行うことで、自分たちがどれほど成長したのかが明確にわかると共に、達成感があり次の目標に向かってがんばることができるようになると思う。

まず今までためてきたいいいこと見つけの掲示を提示し、最初のときの写真と見比べた。比べることで達成感や成果がより明確になると考えた。

授業の中で一人の女の子は自分のよいところに他人から教えて貰い、はじめて気づけた児童がいて、そういった児童に対しては、よい授業になったと思う。しかしながら男女間に若干の壁があるのか、異性の子に書けない子が数人いた。まだまだ相手のことをよく知らないようであった。授業が終わって、児童に感想を聞いたところ、半数以上は、楽しかったや終わりにしたくないなどの肯定的な意見が聞かれたが、数人は、めんどくさかったなどの意見があった。課題として価値づけを児童にしっかりとできなければ、うわべだけのものになってしまうことを強く感じた。また普段からの声掛け次第で星が増減することも分かった。

### (7) 全体の考察

この実習を通しての成果と課題をあげていく。まず、上であげたよいところみつけとふりかえりの2つの活動の利点と欠点をあげ、反省して学んだことをあげる。

	利点	欠点
ふりかえりカード	①振り返りがしっかりとできる。 ②明日に反省がいきる。 ③その場で単発で考えるより考えが広がる。 ④記録として残る。 ⑤教師が気付かなかった見えていなかったところが見える。(情報収集の場にもなる) ⑥児童とのコミュニケーションの手段の一つになる。(特に普段あまり話せない子) ⑦評価を伝える場になる。 ⑧その日のよかったところほめよい方向に成長を促せる。	①児童、一人一人のやる気に左右される。 ②児童が同じことを書いたときに同じような返し方になってしまいがちになる。 ③普段の学級全体でのふりかえりと違い共有ができない。 ④100点がいいという概念との葛藤が児童の中にできてしまう。 ⑤時間の捻出が必要である。 ⑥活動の連続性が足りない。 ⑦児童にとって価値があるものを目指していかなければ意味がない。

	⑨叱咤激励できる。 ⑩生活とめあての結びつきを強める。	
よいところみつけ	①さまざまな意見が出てきて多様な見方で見るができる。 ②目に見えて増えていることが分かる。 ③誰かが見てくれていいることが分かる。	①よいところを書く人、書かれる人が偏りやすい。 ②書かない人は書かずに終わってしまう。

ふりかえりカードの反省点は、欠点でも上げたように、多くを書かない児童に対しての返事が同じようなものになってしまい発展しづらくなってしまったことである。また100点がよいという固定概念が強い児童に対して、ふりかえりが弱いことを上手く伝えることができなかった。同じようにすぐに考えず書く児童、あまり書かない児童への支援が不十分であった。

よいところみつけの反省点としては、枚数が少ない児童への支援や全く書かない児童をその気にさせていくことの支援が弱かったことである。

ある一人の児童が、「自分のよいところなんかあるかな、わからない」と言っていた。しかしながら4週目の授業の中で「友達から、よいところを書いてもらうことで、自分にもよさがあることを知り、ちゃんとみんなが見てくれていたことがわかった。」と終わりに書かせた感想の中で書いていた。は、自分の長所を他者に見つけてもらうことで、自己肯定感を持つことができたと言える。また感想の中には、「まだかいた数が少ないので(よいところ星を)これから書いていきたい。といった意見やずっと続けたいと思ったなど、児童の中の意識の変化も見られた。以下アンケートから児童の意見を抜粋する。

#### よいところ星について

##### 成果

Rさん 人のいいところを書くのは楽しかった。もっと続けたいと思った。

Kくん かげでこんなことを(他の人)が分かって楽しかった。

Kさん 私は、最初よいところ星めんどくさいと思ったけど、かいていたらどんだんみんなのいいところを探すのが楽しくなってきたみんなのいいところを知ることができたのでよかったです。

Rさん もっと友達のよいところを書きたかった。自分のよいところがあって嬉しかった。

##### 反省すべき点

Hさん 書こうとしたときに紙がなかった。

Yくん みなかったです。

## ふりかえりカード（自己採点カード）

### ふりかえりについて

- Kさん 自分のことをふりかえることができよかったです。例えば今日、はみがきができなかったりしたら明日はちゃんとやらなきゃという気持ちになれるのでよかったです。
- Kくん 自分のふりかえりで点数をつけられるから楽しい。
- Hくん 自分がよかったかわるかったかよく分かった。
- Mさん 発表するより、紙に書くとふりかえりやすい。

### 返事について

- Rくん いろいろなアドバイスをくれたからよくふりかえりができた。
- Aさん 私が問題を出してそれにこたえてくれてうれしい気分になります。
- Kくん 櫻井先生がどう思っているかわかるからいい。
- Yくん 先生の返事で元気になれた。
- Tさん いろいろな色を使って書いてくれたからよかった。
- Aさん 先生の返事のためにいつも頑張っているようなものです。先生の返事がなければこんな一生懸命書いてなんかいい！！

### 反省すべき点

- Aさん わざわざかくのがめんどくさい。書くのが嫌だった。
- Sくん 似ている返事が多かった。
- Sさん もっと違うのがいい？色付きがよかったです。
- Yさん 毎日じゃなく週1回とかがいいと思いました。

よいところ星とふりかえりカードそれぞれ児童にアンケートを取ったところ2つの活動に児童の中での受け入れ方の違いが見られた。よいところ星は、比較的多くの児童に受け入れられ、1か月の活動を楽しく行うことができたという意見が多かった。違う意見の児童は、無関心または紙がなくて書くことができなかったが参加の意欲は示しているかのどちらかであった。無関心な児童については、参加意欲が出るように啓発していくべきであったと反省点がある。また紙が不足してしまったのは、準備不足であった。

一方ふりかえりカードは、難色を示す児童が幾人もいた。これは、帰りの会でふりかえりを行い、全員書かせる時間を設けていたため、強制力が出たためだと考える。書くことに慣れていない児童、書くことが苦手な児童、書くことが嫌いな児童は、軒並み難色を示している。よいところ星は、ふりかえりカードに比べ、自由に書かせていたため強制力はない。書くことが慣

れていない、苦手、嫌いな児童も自分の意志で書くかどうかを決めることができたため、すんなりと受け入れた児童が多かった。さらに1日をふりかえる場合、反省として悪いことも思い出さなくてはならないためによいところみつけと違い、負の面もあったことも一因であると考え。そうした児童への支援が十分でなかったことは、反省しなくてはいけないと感じた。

そして、逆に書くことが得意な児童、発表することのほうが苦手な児童は、ふりかえりカードについて高い評価を行っている。高い評価の理由として、楽しい、反省ができる、朱書きの3つの理由があげられた。

点数化することで、楽しいと感じる児童もいれば、「朱書きの返事が楽しい」「コミュニケーションが楽しい」と記述した児童もいた。多く書くことができる児童に対しては、最終週になると時間の余裕も生まれ、たくさんのことを交流していくことができた。児童も、内容を変化させて、反省も深化し、めあての反省だけでなく1日の反省ができるようになっていた。児童にとって朱書きは、大きな影響を与えるものであると感じた。

反省すべきは、めんどくさいと感じる児童たちに対しての朱書きが毎回同じような励ましや啓発、になってしまい参加意欲を引き出すことができなかったことである。そういった児童に対しても書かなくても楽しい、書くともっと楽しいと思えるような朱書きをしていかなくてはいけないと感じた。

その活動の意味をしっかりとらえさせ、意欲付けができるようにしていきたいと感じた。また児童にとってその活動が合う合わないがあることを学ぶことができた。教師力向上実習Ⅰは、私にとって児童を見るという視点で大変大きな学びとなった。

## 4. 教師力向上実習Ⅱ・Ⅲ

### (1) 自己肯定感を高める授業をめざして

授業と自己肯定感の関係は、大きいと考える。授業の中で、自信や自己肯定感を持つことでより積極的に発言をしたり挙手をしたりできるようになると考えた。授業の中でわかっている手をあげない児童や発言をしない児童を少しでも発言できたらと思い、自己肯定感を高める授業を目指そうと考えた。実際に、授業では、児童は黒板にある問題を解きたがる場面によく出会う。その中で、児童にその問題があることを伝え、よりその傾向は顕著になり、挙手も多くなることに気が付いた。

そこから、自己肯定感のある授業とは、児童ができたと感じることのできる授業、自分の答えがあっていると自信を持てることであると考えた。算数と理科について授業を行うこととなり、算数では、手立てとしてプリントを作成することでできると感じるように問題を設定した。理科では、実験を多く行い、今まで経

験したことない実験を行えると感じさせるようにした。そして朱書きを通して意欲を引き出し朱書きの中で認めることで自己肯定感を高めようと考えた。

## (2) 学習プリント作成についての考察

算数は垂直・平行と四角形の単元で行った。算数の授業で児童たちの理解度の把握と基礎の定着、算数の言葉を身につけさせるための指導を行うために毎時間学習プリント(以下プリント)を作成した。作ったプリントは、実習Ⅱで11時間分、実習Ⅲで改良したものを、8時間分作成した。構成は、前回の復習、本時の問題、確かめの問題、練習問題でプリントを作った。実習Ⅱでは、それらに加え朱書きを行うためにわかったことの項目も付けた。図4-1のプリントは、実習Ⅲで使ったもので第6時、台形と平行四辺形についての授業のために作ったものである。プリントの構成としてまず前回の復習を行う。毎回、プリント上部で復習を行い、足りないと感じたところや重要であるところをおさえた。前時にあたる第5時の方眼を使った作図では、方眼の持つ作図しやすいという利点について学び、それについての別の解釈、方法についても載せることで、児童の作図する力を育てようと考えた。

そして、第6時で行う、長方形や三角形を使って台形と平行四辺形を作るという操作活動の上で意識させたい辺の平行について復習の一部として載せることで意識させるようにした。オモテ面、左下部には授業の主題である台形と平行四辺形を操作活動で作成し、それを貼って図形の名前を書くスペースとした。

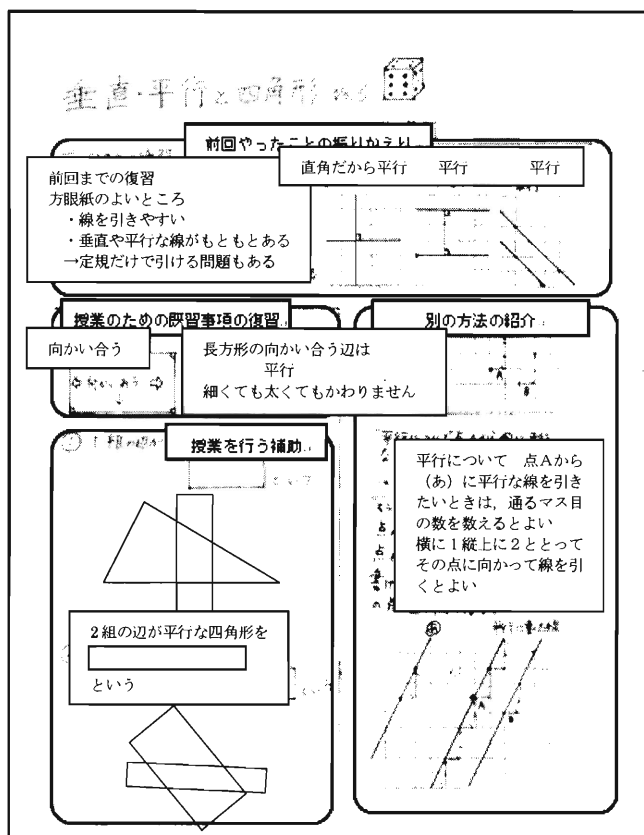


図4-1 (第6時プリント表)

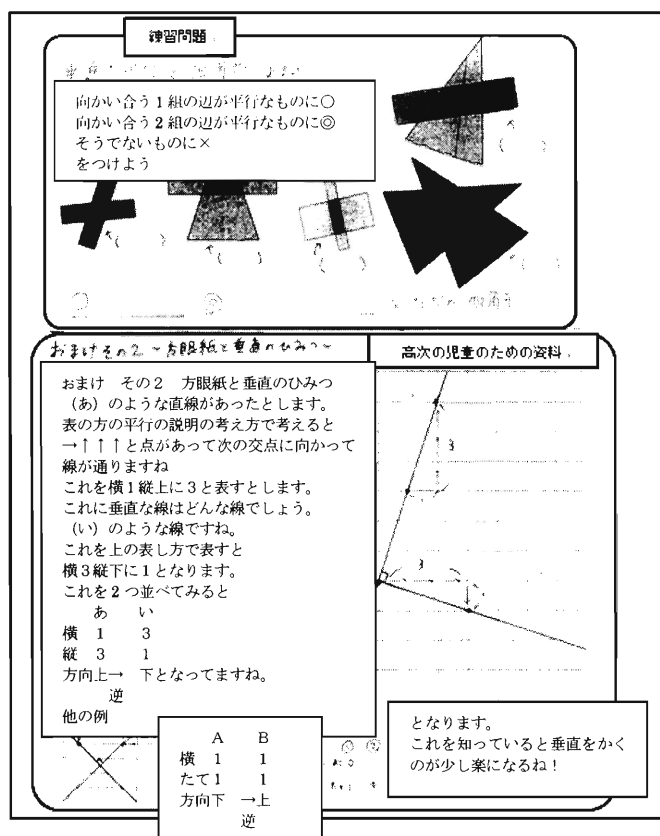


図4-2 (第6時プリント裏)

図4-2プリントの裏には、練習問題を配置し、問題数をこなさせることで台形と平行四辺形という新たな図形の概念の定着を図った。

そして最後の問題に、いつも早く問題を解き終わってしまう高次の児童のために難易度の高いものとした。難易度の高い問題も多く設定したが、第6時は、読み物を用意した。難易度の高い問題は高次の児童だけでなく、全体的に児童に好評で、「今日のは、解くぞ」や「今日のはどんな問題なの?」と問題を意欲的に求めている姿を見ることができた。

児童は、毎回プリントがあることを喜び、教師の頑張りに対応して、授業の中で頑張る姿が見ることができた。児童の意欲を引き出すことができるのは、既存のプリントを使わずに、自作のプリントを使うことによさの一つであると考えた。また、プリントを自作することで、そのクラスに合わせた問題や難易度、教員の授業に合ったものを作成することができると考えた。問題数を増やし、児童の学習の定着を図ったことは、指導教官にも評価された。欠点としては、プリントに沿った授業になってしまい、授業の流れが固定化してしまいやすいこと、問題数を増やすことで授業時間が慢性的に不足しがちになってしまったことである。授業を繰り返し行っていく間に、時間間隔が身につけてきて、時間内に授業を収めることができるようになったことも成果の一つである。

作成したプリントで授業した際の指導で、自分自身のプリントの問題点が分かり、改善した。改善方法は、



方眼がついているコピー専用の紙を使い、線の長さや余白に気を付けてプリントを作成した。

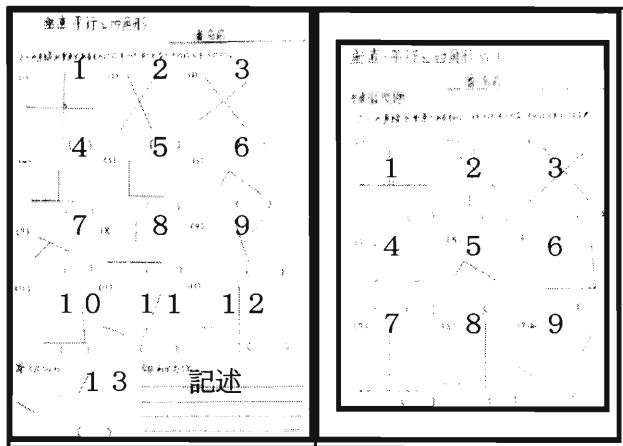


図4-3, 4 (実習ⅡからⅢにかけての改善)

実習Ⅲで授業を行うときプリントの改善を行った。図4-3, 4のように余白を作り問題の数も質も考え厳選した。実習Ⅲでは、授業時間が学校の予定上短くなってしまったので、記述は省略した。問題を大きくすることで解きやすいように配慮した。

### (3) 朱書きの考察

教師力向上実習Ⅰの朱書きと教師力向上実習Ⅱの朱書きで性質の違いを感じた。教師力向上実習Ⅰでの朱書きは、日々の反省の朱書きで生活に関する朱書きであるため、内容が多岐にわたり、またねらいも児童ごとそれぞれである。話題も児童ごとに違ったりするので朱書きの内容も自由度が高い。教師力向上実習Ⅱの朱書きでは、算数の分かったこともしくは感想に対する朱書きになるので、自由度は狭いがねらいや意図をはっきりさせて朱書きすることができる。図3-6は実際の朱書きとその分析である。

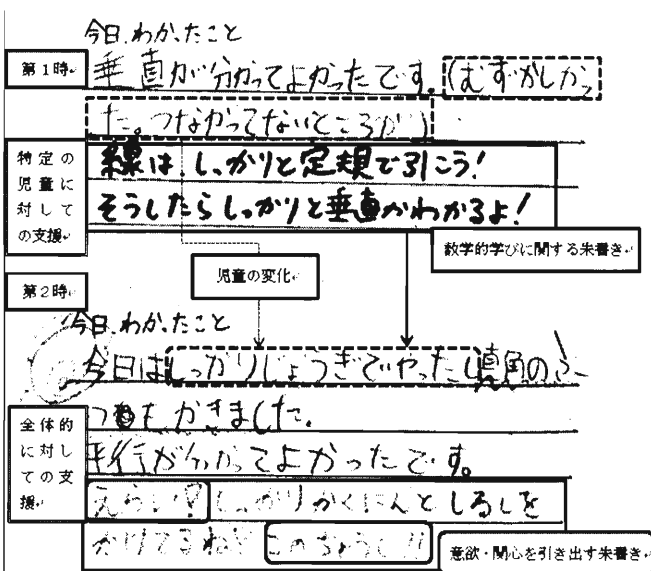


図3-6 (児童の反省と朱書き第1時, 2時の考察)

朱書きには、数学的学びに関する朱書きと、意欲・関心を引き出す励ましの朱書きを行った。数学的な学びに関する朱書きでは、上の児童に関して言うと次の

時間には、効果が出ている。第1時で定規を使わずに問題に取り組み、問題の難しさを感じている。ここで、線を引くことを朱書きで促し、それが実を結び、次の時間に定規を使うことで問題が解けている。朱書きを行うことは、一人一人の児童の記述内容に目を通すので、その児童の状態を把握していく上でも効果があると実感することができた。

### (4) 理科の授業についての考察

理科では、多くの実験を行うことを心掛けた。単元は、わたしたちの理科室、ものの温度と体積の単元を行うこととなった。理科の教材のよさは何と言っても実際に実験を行えるところにある。目の前で器具を操作しながら実験することで主体的に考え、実感を伴った理解ができるところにある。そして、今までやったことのなかった実験や作業を行うことができるようにすることで自己肯定感を伸ばそうと考えた。

授業の中で実験を行うことで、児童が主体的に、発言したり、実験の準備や片付けを積極的に行ったりする姿が見られた。アンケートの中では、理科に自信を持ち好きになったと答えた児童もいた。実験を通して、積極性や主体性を引き出すことができたと考えた。

### (5) 全体の考察

学習プリントを作成し朱書きを行うことで、児童の意欲を引き出し、授業に参加させようというねらいは、おおむね達成できた。プリントに簡単な問題を載せることで、その場で習ったことを使って解けるようにして、どの児童にもできるということを感じさせることができた。その根拠としてこれまで発言しなかった児童が発言したからである。毎日根気よく、発言を促し、朱書きを行った効果が表れた。その児童は、普段から勉強にはついてきているし、発言を求めてその児童を指名すれば発言はするが、自分から手を挙げて発言するのは、私が行った算数の授業では初めてであった。恥ずかしそうに、そして嬉しそうにクラスの皆の前で発言する姿を見ることができた。教師としての頑張りが実を結んだと実感できた瞬間であった。しかし一部の児童は自分から挙手させることはできなかった。よりわかりやすく、できたと実感のある授業を目指さなくてはいけないという課題も残った。実習Ⅱにおいて単元を通して授業を行うことができよかった。すなわち、単元を通しての見通しが見えるようになり、授業と授業をつなぐことや、連続性、系統性を考え授業を組み立てることができるようになった。今後、授業を行うときは連続性、系統性を意識していきたい。

## 5. 全体の成果と課題

実習Ⅰの活動を行うことで、大半の児童は、自分のよいところを知り、自己肯定感を高めることができていた。また他人のよいところを書く活動の中で、生活グループに変化が見られた。友達のよいところを書く

という行為が新たな結びつきを生んでいるようであった。少しずつ遊ぶグループの構成も人が変わり、入ったり出たりを繰り返しているようであった。そうした中で、めんどくさいと意見を書いた児童がアンケートの中でよいところ星を書くことが楽しい及び書かれて嬉しいと書いた児童グループの中へ入った時は、楽しそうに何枚も友達のよいところを探して書くようになっていた。めんどくさいと思っている児童でも周りの児童が活動を楽しんでいけばそうでない児童も巻き込んで活動が大きくなっていく様子が見ることができた。学級で継続的に活動していく時には全体を巻き込んでいくことが必要であると感じた。同様に、よいところ星を全く書かないグループに所属している児童は、書く枚数も少なく、それによるグループ間の交流や移動も少なかったので書いた枚数は少なくなってしまっていた。教師がそういった児童へよいところ書くだけでなく、直接的な働きかけをもっとしてもよかったのではないかと課題を感じ、反省した。

実習Ⅱでは、ある児童が今まで得意でなかった教科を得意だと答え、また、私が行った授業を通して、好きになったとアンケートで答えた児童もいた。より好きになったと答える児童が多くいたことが実習を行っていく上でとても支えとなった。実際の現場に立った時も、授業の準備を怠ることなく授業に臨みたい。そうしていくことで、児童も意欲を見せて授業に臨むということが実習を通して学んだ。特に研究授業では、児童が頑張っ て挙手をしている姿が印象的であった。

第4学年を通して、児童たちは大きく成長した。去年まで、授業中に立ち歩いていた何人かの児童は見る影もない。今その児童たちは、授業に意欲的に参加し、問題について深く考え、挙手をするようになっている。足りないところはあるものの、大きな成長であると言える。一つのことに関わっていた児童は、少しだけ周りを見えるように成長した。すぐ怒っていた児童は、怒る回数が激減した。4年生とは、大きな節目なのかもしれない。通級に通っていた児童が普通学級に戻る回数が増え、去年まで褒めたら、反発して悪態をついていた児童は、褒めると照れくさそうに笑う。そういった児童の成長の姿に会えたことは、幸運なことだと感じる。まず児童のよいところを見つけることは、教員として児童と接していく上で重要である。成績だけでなく、普段の生活から児童全員に目を通していかなくてはいけない。児童のよいところを見つけていくためには、教員一人だけの目ではなく、周りのほかの児童、他の教員の目でも児童を見ていく指導が必要であると学ぶことができた。普段から目を配り褒めたり、肯定したりしていくことで、児童の自己肯定感を伸ばし、そのよいところだけでなく人間として成長させていくことを目指したい。それがよいところみつけを通じた指導の在り方であると私は考える。

## 6. おわりに

教師として大切にしたいことをこの2年間で学ぶことができた。それは、児童のよいところを見ることであり、教材研究を行うことであり、学び続ける姿勢であり、なにより教職の素晴らしさである。

2年前は、教師になることが一つのゴールだと考えていた。しかし今は違う。まだここはゴールではない。むしろようやくスタートに立てたのだ。一つ一つの学びは小さくともこれから先、積み上げていくことで、大きな力としていきたい。たゆまぬ努力と学び、大きな喜びと素晴らしい出会いががこの先の教員人生にあることを切に願う。そしてその研鑽の先に、今まで出会ってきた素晴らしい先生方がいる。そこにたどり着くまで歩み続けていきたい。

【付記】大学院2年間の実習は、以下の学校でさせていただいた。

〈学校サポーター〉(教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ)

みよし市立北部小学校 (杉浦和人校長先生・林 伊津子先生・松永康史先生)

〈特別課題実習〉

豊田市立東保見小学校(新美隆一校長先生)

〈教師力向上実習Ⅲ〉

名古屋市立森孝西小学校(木村和良校長先生・辻本 秀樹先生)

尚、実習中は多くの先生方にご指導ご助言頂きました。本来ならば一人ずつお名前をあげるべきですが、ここでは省かせていただきます。お世話になった全ての先生方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーターで継続的にご指導してくださった恒川武久先生、中妻雅彦先生、志水廣先生、実習Ⅰ・Ⅱでご指導してくださった中妻雅彦先生、志水廣先生、実習Ⅲでご指導してくださった山田久義先生、修了報告書で指導していただいた志水廣先生に、厚くお礼申し上げます。

【注記】

注1) 竹田レイ子「自尊感情を高める」荒木紀幸編著『教育心理学の最先端 自尊感情の育成と学校生活の充実』(あいり出版・2007.3) p.178

【主な参考文献】

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 算数編』(東洋館出版社・2008.8)
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 理科編』(大日本図書・2008.8)
- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』(東洋館出版社・2008.8)
- (4) 荒木紀幸編著『教育心理学の最先端 自尊感情の育成と学校生活の充実』(あいり出版・2007.3)
- (5) 志水廣『算数力がつく教え方ガイドブック』(明治図書・2006.7)
- (6) 文部省『小学校算数指導資料 図形の指導』(大日本図書・1982.7)
- (7) 長野県岡谷市立岡谷小学校授業研究会、井出誠一「子どもの意欲を高める朱書き文例集」(『楽しい算数の授業 2010年4月号ー2011年11月号』明治図書・2008.3-2011.10)
- (8) 國分康孝編著『構成的グループ・エンカウンター』(誠信書房・1992.11)